



Title	表現意図とその音声的特徴との関係 : 否定的傾きの有無による問い返し文の違い
Author(s)	増本, 佳奈子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2002, 36, p. 63-79
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56564
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

表現意図とその音声的特徴との関係

— 否定的傾きの有無による問い返し文の違い —

増 本 佳 奈 子

1. はじめに

人にはそれぞれ話し方の癖があり、中には使い分ける人もいる。各自の話し方は話し手の発話意図や感情、年齢、体調等を判断する材料となり、気が荒い、上品といった人物評価にもつながる。松崎・河野（1998）、松崎（2001）が指摘するように、このような人物評価は本人の預かり知らぬところで行われていることが多い。また感情、態度に関する問題点の場合、ある発話を不快に感じたとしても、不快にさせる状況を招く意図が話し手本人にあったのかを聞き手が確認することはまれであろう。話し手は知らないうちに聞き手にマイナス評価を受けている可能性がある。本稿では話し手への評価に関わる要素として、いわゆる「詰問」や「反問」¹⁾に関して、首都圏共通語話者の多数派がどのような音声を使用するのかという音響音声学的な実態とともに、様々な表現方法の存在について報告したい。

2. 表現意図・韻律・パラ言語に関する先行研究とその問題点

発話意図、感情、パラ言語情報等と音声の関係については様々な見解があるが、そこには4の問題が潜んでいると思われる。1つは発話意図等の分類方法が研究者によって異なり、用語も異なる点である。例えば、樋口（1997）と斎藤（2001）はほぼ同じ観点から分類しているが、樋口（1997）

の「非言語情報」が斎藤（2001）では「エクストラ言語的情報」と呼ばれるように用語が違い、小林・北澤（2001）にいたっては分類の基準そのものが違っているばかりか、同じ用語を使って別の概念を表している。²⁾研究者がそれぞれ別の分類、用語を使うことは研究をいたずらに複雑にしていると思われる。2点目は音響音声学の実証のないままに研究者の内省によって音声の特徴が記述されている点である。服部（1999）、川上（2000）は明らかに不正確な思い込みによる音声の記述が文法研究者に見受けられることを指摘している。3点目は現実には分離できない要素を分離して記述しようとしている点である。樋口（1997）は話者が意図的に制御しえる情報（発話意図・発話様式など）と、話者の意思では制御し得ない情報（年齢、性別等、話者の物理的特性によって決まるもの）とを分けている。これは、理論として音声的特徴や、その要因を分類する際には重要な分類方法であるが、実験音声学としてはこれらを分離して分析することはできない。また「疑問」「反問」「怒り」「悲しみ」等の用語を使って単純に分類した場合、その語の受け取り方は様々であるので、これをインフォーマントから発話を引き出す際に使用すれば、インフォーマントと研究者の間にギャップが生じ、さまざまな発話が混在することになる。4点目はプロソディーには単純化した見方が広く行われており、特定の表現意図には特定の音声が一対一対応するという前提で研究が進められていることである。例えば、Aという表現意図であれば、A'というプロソディーが対応するという記述がなされている。しかし、本研究では「どの言い方で言うのがいいか」と尋ねたインフォーマントや、実験中に言い方が変化したインフォーマントが存在した。「どの言い方で言うのがいいか」と尋ねるということは、インフォーマントにさまざまな言い方の自覚があるということあり、全く同じコンテキストであっても、音声は複数存在すると考えられる。理論として整理するためにはある程度単純化することも必要

であるが、実際の現象について詳しい記述もされるべきであろう。

以上の問題点から、本研究では韻律、パラ言語等の用語を分類・使用せず、表現意図と呼び、否定的傾きの有無の違いを持った2つのコンテキストを細かく規定し、そこで実現される音声の特徴を報告する。

3. 実験

自然談話での発話では発話者の表現意図の1つだけが違い、それ以外は全て同じコンテキストというものは現れない。そこで本研究ではインフォーマントに演じてもらう方法をとった。本節ではコンテキストの違いを作り出している「否定的傾き」についてまず定義し、次に実験に使用したコンテキストを呈示する。

3. 1. 否定的傾きとは

安達(1999)は“傾き(bias)とは疑問視されている事態の是非について、話し手が肯定、否定のどちらの答えを期待するかという話し手の見込みのこと”と定義している。例えば「明日行く?」という発話の場合、次の3通りがある。聞き手が行くのか行かないのか全く予想できない場合、聞き手は行くだろうという予想のもとに発話している場合、聞き手は行かないだろうという予想のもとに発話している場合である。行くだろうと判断していれば、肯定の傾きがあることになり、行かないだろうと予測していれば否定の傾きがあることになる。

本研究では、否定的傾きを区別して発話するのかどうかを明らかにするために問い返し文を使用した。通常質問文では前提となる発話がなく、ある質問文が相手の意見に反対しているかどうか定かでないため、話し手の見込み(傾き)を決定できないが、問い返し文の場合は前提となる相手の発話があるので、傾きを決定することができると考えるからである。

3. 2. 本研究で扱うコンテキスト

本研究では次の2つのコンテキストを使用する。ケース1は否定的傾きがなく、ケース2に否定的傾きがある。インフォーマントは“あなた「とうきょう」”という部分のみを発話する。

<ケース1>あなたと親しい友人のAさんはクイズ大会に出ています。あなたはAさんはクイズが得意だと思っています。2人はチームを組んでいます。このクイズ大会では、解答はパネルに書きます。あなたは書く役をしているので、ペンとパネルを持っています。これから答えなければならない問題についてはあなたは答えがまったく分かりません。ですから、Aさんが言う答えをそのまま書くつもりです。Aさんによるとこの問題の答えは「東京」だそうです。あなたは「東京」だと聞き取りはしましたが、答えを書くので、今聞いたことがあなたの聞き間違いではないことを確認します。

Aさん 「答えは東京だよ。」

あなた 「とうきょう」

<ケース2>あなたと親しい友人のAさんはクイズ大会に出ています。あなたはAさんはクイズが得意だと思っています。2人はチームを組んでいます。このクイズ大会では、解答はパネルに書きます。あなたは書く役をしているので、ペンとパネルを持っています。これから答えなければならない問題についてはあなたは答えは「大阪」だと思っています。しかし、Aさんは答えは「東京」だと言います。あなたは「違うよ。答えは東京じゃなくて、大阪だ。」という気持ちで、Aさんに答えを確認します。

Aさん 「答えは東京だよ。」

あなた 「とうきょう」

「とうきょう」の部分に入る調査語は、有声音だけからなり、CVCV もしくは、CV 構造の名詞一語文である19語とした。本稿ではこのうち5語（ま（間） め（目） み（実） む（無） も（藻））について報告する。

3. 3. 実験の手順

実験に1時間強かかることを考慮し、実験は以下の4つの手順とし、休息をはさむことで、インフォーマントの緊張を解き、疲労を溜めさせないように心がけた。

<手順1>インフォーマントに調査語のリストを見せ、語彙の確認をした後、2つのコンテキストについて説明し、納得がいくまで練習してもらった。コンテキストの理解は、説明の後で「聞き手はどのような人ですか」などの質問をインフォーマントに答えてもらうことで確認した。なお、インフォーマントには次のような注意を口頭で与えた。

- ・ Aさんは同性、同年齢の親友で、何でも言い合える仲である。
- ・ Aさんに特別敬意を払う必要はない。
- ・ Aさんが何らかの返事をするような言い方にする。
- ・ 俳優になったつもりで発話し、ポーカフェイスはしない。
- ・ 様々な言い方がある場合は、一番自然だと思うものを選んで言う。

<手順2>すべての調査語が1語ずつ書かれたカードを5回ずつ特別な感情を込めずに、読み上げるように指示した。カードを見せた後、2秒から4秒ごとに手で合図した。インフォーマントには、好きなだけ考える時間をとって良いと指示した。読み上げについては、これを2セット行った。

<手順3>ケース1かケース2かの指示と、どの調査語かという指示の2つが書かれたカードを調査者が見せ、インフォーマントは調査者の手の合図に従って、5回ずつ発話した。1セットとして190発話（19語×2コンテキスト×5回の発話）を収録し、これを2セット繰り返したので、

1名のインフォーマントにつき計380発話を収録した。雑音が入った場合、もしくはインフォーマント本人が失敗したと言及した場合には言い直してもらった。

＜手順4＞すべての発話が収録された後、インフォーマントは、意図したはずの言葉（どの調査語のどちらのケースか）が順番に書かれたリストを見ながら、適切に発話できていると思うかどうかを3段階で評価した。分析に使ったものは適切と判断されたもののみである。

3. 4. インフォーマント

インフォーマントは大学生以上30代までの首都圏共通語話者、女性14名、男性9名、計23名である。本研究において、首都圏共通語とは首都圏で使われている共通語を意味する。これは、一般に東京語、東京方言³⁾と呼ばれるものに当たると考える。また、首都圏共通語話者とは小学校、中学校、高校時代に首都圏で過ごした者とした。

3. 5. 録音環境

録音機材として DAT (TCD-D100, Sony)、エレクトレットコンデンサーマイクロホン (ECM717, Sony) を使用した。サンプリング周波数は 44.1kHz である。収録場所は 2 名が無響室、1 名が収録室、残り 20 名は民家である。

4. 実験結果

本稿では CV 構造をもつ 5 つの調査語 (/ま//み//む//め//も/) の発話速度 (持続時間) とピッチレンジ (基本周波数 F_0 の幅) について報告する。⁴⁾ 分析には SUGI SpeechAnalyzer を使用した。インフォーマントは以下に説明する 4 種類の型 (A 型、B 型、C 型、D 型) で、ケース 1 ケー

ス2を発話した。内訳はA型が14名、B型が6名、C型が2名、D型は1名であった。本研究のインフォーマントは23名で、決して多くなく、また、C型、D型は少ないので実験的状况での芝居や、内省の得手不得手も含めた個人差も無視できないが、A型とB型は数の上からも主要な2つの型と考えられる。

4. 1. A型について

A型は男性4名女性10名であり、図1（インフォーマント6（女声）の/め/）、図2（インフォーマント20（男声）の/め/）が典型的な音声波形と

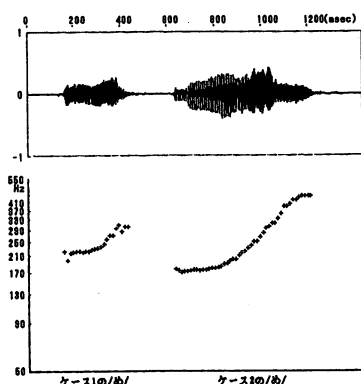


図1 A型の典型例(1)

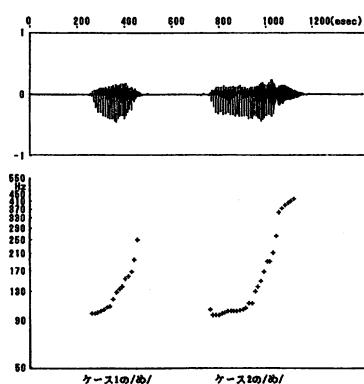


図2 A型の典型例(2)

ピッチ曲線である。A型のケース1（以下A-1）とA型のケース2（以下A-2）は共に上昇するが、A-2のほうが大きく上昇し、持続時間も長い。個人差も大きいものの、各インフォーマントの持続時間の平均値はA-1が173(ms)から312(ms)の間にあり、A-2では191(ms)から667(ms)である。

インフォーマントそれぞれについてA-1とA-2の持続時間に関してチューデントのt検定（分散が等しくないと仮定した2標本による検定）

を用いて有意差の検定を行った結果が表1である。有意差の認められない調査語のあるインフォーマントが3名存在するが、これはサンプル数が少ないことが原因であると思われる。残りの11名に関しては統計的な有意差が認められる。また、23名全員について持続時間に関して $(A-1) > (A-2)$ というデータは存在しない。よって、A型では、持続時間に有意差があり、持続時間に関して $(A-1) < (A-2)$ が成り立つ。

個人差が大きいものの、ピッチレンジを対数表示で表す5)とA-1は0.08から0.43、A-2では0.13から0.67に平均値が分布する。インフォーマントごとにピッチレンジの割合を比べ、スチューデントのt検定を用いて有意差があるかどうかを検証した結果が表2である。/む/、/も/に関して是有意差が認められないケースが多いが、全体として有意差が認められる。よって、語によって差があるもののA型では、ケース1とケース2のピッチレンジには有意差があり、ピッチレンジに関して $(A-1) < (A-2)$ が成り立つと言ってよいであろう。

なお、インフォーマント5、12、13、14、15、20に有意さが認められないのは、サンプル数が少ないことが原因かと思われる。(14の/め/、15の/む/では危険率10%では有意差が見られる。) また、インフォーマント1、2、3については $(A-1) > (A-2)$ という場合もみられ、基本はA型であるものの、ピッチレンジについてはゆれが大きいインフォーマントであると考えられるが、その他については統計的に有意な差が認められない場合も $(A-1) > (A-2)$ というデータは存在しない。

表1 A-1とA-2の持続時間の有意差の有無
(危険率 ** = 1% * = 5% ○ = 10%)

インフォーマント	ま	み	む	め	も
1	**		**		
2		**	**		**
3	**	**	**	**	**
4	**	**	**	**	**
5	**	**	**	**	**
6	**	**	**	**	**
8	**	**	**	**	**
9	**	**	**	○	**
10	**	**	**	**	**
12	**	**	**	**	**
13	**	**		**	**
14	○	*	**	*	**
15	**	**	**	**	**
20	**	**	**	**	**

表2 A-1とA-2のピッチレンジに有意差の有無
(危険率 ** = 1% * = 5% ○ = 10%)

インフォーマント	ま	み	む	め	も
1	**		**		
2	**	**	**		
3	*	*	*		
4	**	**	**	**	*
5	**	**	*		**
6	**	**	**	**	**
8	**	**	**	**	**
9	**	**	**	**	**
10	**	**	*	*	*
12	**	**	**		
13	*	**		*	**
14		○	*		*
15	**	**	**	○	*
20	**	**	**	*	

4. 2. B型について

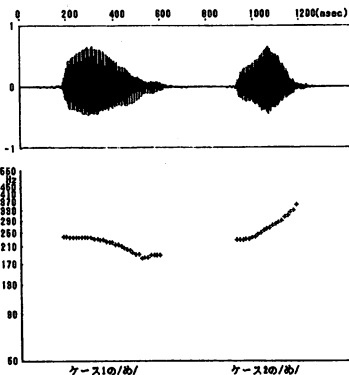


図3 B型の典型例(1)

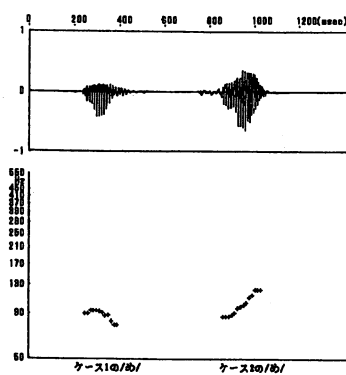


図4 B型の典型例(2)

B型は女性2名男性4名の6名であり、図3（インフォーマント17（女声）の/め/）、図4（インフォーマント19（男声）の/め/）が典型的な音波形とピッチ曲線である。B型のケース1（以下B-1）は上昇しない。自然下降の可能性もあるので、意図的な下降が行われているのかどうかは不明であるが、少なくとも基本周波数は下がるか平坦に伸びる。（以下説明なく「下降」と表現する場合は、意図的な下降ではなく、自然下降も含

めたピッチ曲線の下降を意味する。) B型のケース2 (以下 B-2) は A-1 と似ている。B-2の持続時間は B-1の0.6倍から1.4倍で、2つの間には大きな差が見られない。発話ごとの差が大きく、全体としての傾向は見られず、持続時間について統計的にも有意な傾向は見られない。A-1、A-2、B-2はどれも上昇型のピッチパターンを持つので、相互の関係を調べるためにピッチレンジと持続時間についてスチューデントの t 検定を行った結果、A-1と B-2ではピッチレンジについても持続時間についても有意差が認められなかったが、A-2と B-2では危険率0.1%で両方に有意差が認められた。よって B-2は A-1と近似するといえる。7)

4. 3. C型について

C型は女性2名であり、図5 (インフォーマント7 (女声) の/め/) が典型的な音声波形とピッチ曲線である。C型のケース1 (以下 C-1) は B-1と同様で、平坦になるか、軽く下降する。C型のケース2 (以下 C-2) では A-2のように、ピッチの上昇がより大きく、持続時間も長い。C-1、C-2の持続時間に有意差があるかどうかをスチューデントの t 検定を用いて検証した結果、すべてのデータにおいて少なくとも危険率5%で有意差が認められた。よって、C型では持続時間について $(C-1) < (C-2)$ が成り立つ。

基本的に C-1は下降し、C-2は上昇するが、C-1については明らかに下降するものもあれば、平坦に持続し、文末でわずかに上昇するものもあり、分析が困難なため、C型の下降とB型の下降に共通性があるかについては本稿では触れない。C-2は上昇しており、A-2に近似すると思われる。これを検証するために、スチューデントの t 検定を用いて、C-2と A-1、C-2と A-2をそれぞれ検定した。7) その結果、A-2と C-2では有意差が認められなかったが、A-1と C-2では危険率0.1%で有意差が認められた。同

様にして、同じく上昇する B-2と C-2のピッチレンジについて検定したところ、危険率0.1%で有意な差が見られた。

持続時間についても、同様に検定を行ったところ、A-2との間には有意差は見られず、A-1、B-2との間に統計的な有意差が見られた。つまり、C型はA-2と近似しているといえる。⁸⁾

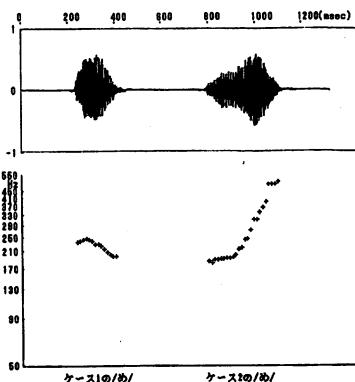


図5 C型の典型例

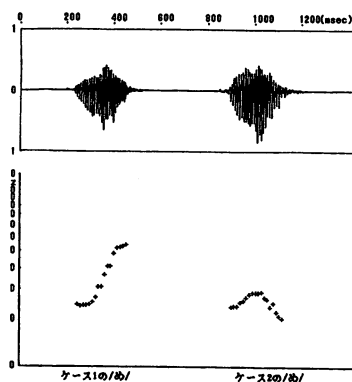


図6 D型の典型例

4. 4. D型について

D型は男性1名だけである。このインフォーマントの典型例は図6で、インフォーマント23（男声）の/め/の音声波形とピッチ曲線である。D型のケース1（以下D-1）は軽くピッチを上昇させており、A-2と似ている。D型のケース2（以下D-2）では基本的には下降する。D-2については明らかに下降するものがほとんどであるが、上昇していくものもまれにある。個人の中で差があるため、取り扱いが難しいため、下降に関しては本稿では取り上げない。D-1、D-2の持続時間にはほとんど違いがなく、チューデントのt検定を行ったが、どの調査語にも有意差は見られなかった。下降に関しては揺れが大きいいため、D型の下降とB、C型の下降の共通性の有無は本稿では触れないが、D-2はB-1、C-1同様下降し、D-1は上昇

する。知覚印象からはD-1はA-2に近似すると思われる。これを検証するために、スチューデントのt検定を用いて、D-1とA-1、D-1とA-2をそれぞれ検定した結果、9) ピッチレンジについてA-2とD-1には有意差が認められなかったが、A-1とD-1では危険率1%で有意差が認められた。同様にして、D-2とB-2、C-2のピッチレンジについて検定を行ったところ、B-2とは有意差が見られなかったが、C-2とは危険率1%で有意な差が見られた。持続時間についても、同様に検定を行ったところ、A-2、B-2との間には有意差がみられなかったが、A-1との間には危険率5%で有意差が認められた。また、C-2との間にも有意差が見られた。つまり、D-2はA-2とのみ近似していることになる。

5. 4つの型の間に見られる関係

上昇調をとる5つ(A-1、A-2、B-2、C-2、D-1)の持続時間とピッチレンジについての相互関係をt検定で検証するとピッチレンジについて $A-1 < B-2 < D-1 < A-2 < C-2$ 、持続時間に関しては $A-1 < B-2 < D-1 < C-2 < A-2$ が成り立つといえる。それぞれ、距離を単純化して図示すると、次のようになる。

ピッチレンジについて	A-1	B-2	D-1	A-2	C-2
持続時間について	A-1	B-2	D-1	C-2	A-2

また、上昇しないものも含めて計8種類(4型×2ケース)の音声について音声的な特徴を分類すると、表3のようにまとめられる。上昇するものについては基本周波数の変動と持続時間との関係をプロットした。上昇しないものも下降の度合いの大小や、持続時間の違いが見られるはずであるが、下降についてはインフォーマントの中でゆれが大きかったため、分析を断念した。このゆれが、語による使い分けなのか、アクセントとして起こったのかは今後明らかにすべき課題である。

表3 2つのコンタクトに現れる音声の分類

		基本周波数の変動		
		上昇		下降
		小	大	
持続時間	短	・ A-1 ・ B-2 ・ D-1		
	長	・ C-2 ・ A-2		
		B-1 C-1 D-2		

興味深い点は、ケースの違う発話が近いところに存在することである(A-1とB-2や、B-1とC-1、D-2)。A型の話者にとってはケース1の発話であっても、B型の話者にとってはケース2と知覚されるのであれば、A型の話者とB型の話者が話す場合には、誤解が生まれる可能性もある。これを明らかにするには知覚実験が必要である。

6. まとめ

可能な限りコンテキストを限定することを試みたにもかかわらず、本研究では4つの型が現れた。これは、内省による記述は危険であるということの証明になると思われる。内省を行う研究者とその記述を読む読者は違う型を使用しているかもしれない。また、予備実験の段階では、インフォーマントが筆者にとって意外な発話をする、コンテキストを理解していないのではないかという不安から、コンテキストについての注意を再三与えてしまった。そのため、インフォーマントが期待されている音声に気づき、その音声を提供しようとした可能性があった。この反省に基づき、本実験ではコンテキストの説明には十分な時間をかけたが、インフォーマントが練習を始めた後は、筆者にとって意外な音声であっても、意外だという思いを態度に表さないよう努めた。しかし、練習段階ではB型で発話したインフォーマントのうち3名が収録時にはA型で発話した上、BCD型で発話するインフォーマントにはゆれの起こるインフォーマントが多かつ

た。また、6名が複数の言い方があるが、どの言い方がいいかと尋ねた。このことから、先行研究で述べられていた表現意図と音声との一対一対応は不適切であると考えられる。これは、人は様々な音声表現を持っているものの、場面によって使い分けており、普段使わないあるいは、聴かないものもあるということであろう。A型が多数派ではあるが、個人が持つ型として、B型、C型、D型が存在し、実際の言語使用では、それらが混用されると思われる。これについては、インフォーマントを増やし、知覚実験をで検証する必要がある。

なお、本研究では日本語母語話者をインフォーマントとしたが、母語話者にも様々な音声が存在することが明らかとなった。母語話者間にも様々な違いがあるのであれば、非母語話者が様々な音声を使用するのは当然のことであろう。A型で発話したインフォーマントのコメントの中には、「B型で発話することはない。」あるいは、「B型では話し手の考えていることが理解できない。」というものがあつた。また逆に、B型のインフォーマントが「A型では発話しない。」とコメントしている例もある。しかし、すでに紹介した「練習ではB型、収録ではA型」というインフォーマントの存在からは、人は普段の生活で使用するか否かに関わらず、様々な型を内に秘めていると言えるのではないだろうか。音声の研究が従うべき規範を探し出すことを目標とし、学習者が努力して「直す」ことで問題を解決していくのではなく、様々な音声表現の存在をはっきり示し、少数派も一変種として理解されるように貢献できればよいと思う。

謝辞

本研究の調査にあたり、様々な点でお世話になった土岐哲教授、青木直子助教授、及び多くのインフォーマントの方々に感謝申し上げます。

註

- 1) 本研究では、詰問、反問という用語は使用しない。その理由については2節を参照のこと
- 2) 樋口 (1997) におけるパラ言語は「発話意図・発話様式など同一文、同一話者であっても意図的に制御し得る情報」であるのに対し、小林・北澤 (2000) におけるパラ言語とは「話し手の聞き手に対する心的態度や感情をコード化したもの」である。
- 3) 東京の下町で使用される伝統的な方言をさすことも多いが、「主に東京地方で話される共通語」として使用される場合もある。
- 4) プロソディーには従来言われてきた基本周波数の変動だけでなく、母音フォルマントやインテンシティーにも違いがあることが前川 (1999) 江崎 (2001b) などに報告されている。これらの分析は今後の課題である。
- 5) 本研究ではピッチに関して対数を利用する。その理由は周波数と音の心理的尺度が単純な比例関係になく、対数表示のほうが知覚に近似するとされているからである。
- 6) ピッチレンジと持続時間についてのみいえることであり、フォルマント周波数や、インテンシティーについても同じであるかどうかは明らかでない。
- 7) A型のインフォーマント1はゆれが大きいので、検定の際、標本からはずした。
- 8) ピッチレンジと持続時間についてのみいえることであり、フォルマント周波数や、インテンシティーについても同じであるかどうかは明らかでない。
- 9) A型のインフォーマント1はゆれが大きいので、検定の際、標本からはずした。

引用文献

- 安達太郎 (1999) 『Frontier series 日本語研究叢書 日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 今田滋子編 (1999) 『地域の日本語教育活性化のための談話音声の研究』文部省科学研究費補助金 基盤研究 B(2) 研究成果報告書 課題番号8458056
- 江崎哲也 (2001a) 「名詞一語文「CVCV?」と「CVCV。」のフォルマント周波数」『第15回日本音声学会全国大会予稿集』日本音声学会
- 江崎哲也 (2001b) 「東京方言の名詞一語文——イントネーションはすなわち高さの変動か——」『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語

教育学会

- 音声文法研究会編 (1997)『文法と音声』くろしお出版
- 音声文法研究会編 (1999)『文法と音声2』くろしお出版
- 片桐恭弘 (1995)「終助詞とイントネーション」『第12回言語・音声理解と対話研究会資料』SIG-SLUD-9502-5人工知能学会
- 川上葵 (2000)「服部氏のネの音調の説に同調」『国語学』51-3国語学会
- 河津基 (2001)「東京語の句頭上昇イントネーションの音響的分析——東京話者および学習者の発話——」『第15回日本音声学会全国大会予稿集』日本音声学会
- 河野俊之 (1992)「プロソディーと感情的表現——無意味語および一語文を用いて——」『日本語音声と日本語教育』『日本語音声』D1班1992年度報告書 pp.9-17
- 河野俊之 (1995)「プロソディーと丁寧表現——東京・大阪・名古屋の方言差を考慮して——」『音声学会会報』208
- 国立国語研究所 (1960)『国立国語研究所報告8話しことばの文型(1)——対話資料による研究——』秀英出版
- 小林聡・北澤茂良 (2000)「日本語の自然対話音声におけるパラ言語的特徴の検討」『日本音響学会誌』56-7日本音響学会
- 斎藤純男 (2001)「音調の分析」『日本語教育学シリーズ<第3巻>コンピュータ音声学』城生佰太郎編 おうふう
- 服部匡 (1999)「終助詞ネの音調に関する森山説への疑問」『国語学』199国語学会
- 樋口宜男 (1997)「音声表現に現れた話者の感情」『日本語学』16-10 明治書院
- 松崎寛 (2001)「日本語の音声教育」『日本語教育学シリーズ第3巻 コンピュータ音声学』城生佰太郎編 おうふう
- 松崎寛・河野俊之 (1998)『日本語教師・分野別マスターシリーズ よくわかる音声』アルク
- 【使用したソフト】
- 杉藤美代子監修・著“SUGI SpeechAnalyzer Version 1.07” 株式会社アニモ
- * “SUGI SpeechAnalyzer Version 1.07” は大阪大学大学院文学研究科日本語学研究室のものを使わせていただいた。

(大学院前期課程修了生)

The difference of pitch pattern between questions with negative bias and questions without negative bias in Japanese

Kanako MASUMOTO

The sound of Japanese sentences depends on speakers' attitude toward the subject. The information of the acoustic feature on those attitudes is important to know for having good communication. The main purpose of this article is to describe the difference between two questions, question with negative bias and question without negative bias, among native Japanese speakers.

In this research twenty-three native Japanese speakers produced one-word utterances of Japanese metropolitan dialect. The informants displayed to four different types of production. Fourteen informants produced the pair of one-word utterances in the same way. In this major type, the pitch patterns of both two question sentences show rising curves. The duration of the question with negative bias is longer than the question without negative bias, and pitch range of the question with negative bias is larger than the question without negative bias. The other nine informants produced in different way. Strictly speaking, this group can be divided to three types. Their common feature is that they have the pitch pattern of falling curve in one of the two question sentences. The rising intonation can be said to be the major pattern and the other intonation patterns are minor. The existence of four variations tells us that even native speakers speak Japanese in different ways.

キーワード：首都圏共通語 問い返し文 否定的傾き 基本周波数
持続時間